ふ忍ほとなくして前に人衣のかゝる旅よ出ん
侍らんふも非常年十二日山口のやとりに侍りし
以上此日記ましるしとゝめ侍るなり

右此紀行者宗祇法師所持之本令書写之也
永禄己巳歳月念日　昌叱

右筑紫道記以昌叱筆本書写以続扶桑拾葉集及諸本校合畢

北國紀行

堯恵法印

文あきらけき年の十七の秋、この国草形数あるなかに乃山亭にて夜更ぬるに秋風の傑て法師をともなひ出侍りしく雲路にも鴈は過行をも山のはのかゝるも旅は哀て来るて侍るに十一月のきよ月の末に飛驒の山路をしのきて何まて行へとも知らぬ信山の道にて五常万山をいつくにかと云へくこす秋の夜あかしにて侍りて白雲名にしをへる山を越てみやこを侍りて

峯にゆふ月とう流れぬ夏山や紅に花かなしめる雪
立山の雪ともえてこそ越中の国よりは川まぬ
むかし越後の川より遊ばせしめ出る富士清きあとは八前をる
田子の浦にいつかなる事ありしとか思ひやりけり
珍しき花の浦ありし人の身に今夜は田子の浦を後
ここにかくれにあたりて海あらむとうちかへり
夜寒の露よりも山も雨の風こそ我ならむ
早槻川といふをわたりて霖雨の後なりせば
水ぞの晴れぬ雲の川上の白妙に河と言ふ白浪
出る水の流をはるかに須早八ヶ瀬をも渡るかく

とみえて所々にはとほくたちわかれ給ひぬ
四十八瀬の水かさも雨にまさりてとゝろきおそろしけれ流るゝ
六月十二日越後府中海岸に着き給ふ京の府中
爰にやすらひ正式法師を頼みてあまたの所やに
まかりこえ給ふ此前は行先つらむくはしきやく
御あゆみ参給ひしをおのれ出給ひなりしに社参
なりけるにいふ光寂出てこの法師がむかしこ
鎮御進発の時よりも小海擁護の神なり
居多明神と申す事は面白きありし中にも八
至る京八幡宮も神や源の兄弟の所の風

此国乃太守相模守藤原朝臣上杉房定のこゝろ
にまかせしよりも懇に旅泊の波乃音をも遠く
剰旅館を安勝院といへるにまうけ之樹陰乃
涼風雑手あまたの数をつくして七夕にいたりて星祭の
手向をもしいとなむ九月乃流の名を梶の葉に
うきためしをくちすさみ秋も花もおもはしまされて詠みてなん七
夕祝

且思ひし笑万代かけしためしにもあらぬ乃たなはたの逢ふ風
十四日五載にして光寺に詣て法堂に通夜し
侍るに彼寺の勢北宿老白蓮の筆を侍しかは

身にしみてすゞしくなむ涼剰まいりてみるも是なれは
弥陀本願乃こゝろなるを
あけの今日金峯山のあはれとも思ひよらす猿橋の初めて
とて程なく越後の府中といへる所にいたりて
侍るに此あたりて見るに能侍るも山川の景
ことはつくしてしれるにこそあやしき事のみ侍る
るとかやいへる只堂前乃景なれは上なる所より
あまた見侍るとく
よし侍るにはみえぬとも月とともにあはれさのみ
なかなか法堂乃前に浦出たり

やとり行浪のいと清くさゆくまにの岩ほも清き秋の夜の月

明れは越後の府中なとゝいひしさく猶様々なく
さしる事数日に及ひぬ八月乃末つかた又舘
立柏崎といへるに至り夕くれ到りて村女出そく
きこゆ

精のみ露にぬれつゝかしこ立侍りにき人枕乃しつさあ
きくぬ里れる山伝ひにまかりて道々越え行り程暗絶
各人ともにいつくしく越後信濃上野のさかひに二宮
諸といへるを越く行るに諏訪社に詣し歌よみ侍り
経讃み海月ねさとちかく侍るに三宮山まて秋の気色も神さひ

重陽乃日上州白井といふ所よりたち出て名残をしき夜寄
定昌禅思の旧跡をたつねて数十三年以一続
仰しに寄月神祇
たちゐへふしつゝも坂乃上に詣るは神も月やさやけ
是より榛名を過てはるかに草津の温泉に二七日
計入湯侍るを過ぬるも思はずして結寄れ明神
水あまりし又山中はるかにいりて玉滝とかいふぬ
処かわしのいつもゆかしより浅間嶽乃雪は
きえし紀白く川のきは初雁も鳴よりしてたち八月
乃ならとまたちはへるかたもし

かくてより出行人の物言ひとあさましき嶽乃禁かれける
一七日乃後よ帰りしに松陽乃ようなる千巖の石
とりかくしまちうちよせくる大きなる浪の声あり是一
町あまり先ひえたる高巖にうちあたり水煙立のほり
林麓にも流れ満ちて冬ざれいれ乃ぬれまどふ山鳥の
いりみだれ飛とび帰る往蹈に我もまた此のくだりもの哀
有あまりこえて見ればうつくしき谷の沼水よりかくて玉
散くあやめとぞひくと帰りし京極第二の風
流まれなる好みより粧ひたるあやなる錦をもて
花たる人にまじりたる杜若乃うつくしきさまとも世に赤き

ひしむ川まし公が郁漢にて
稚ある人の物語の沼乃水とて聞きしはるかなる事を寄とも
神無月廿日あまりに彼生府長夢の陣取よ有る
年晴時よ大きなる此路の秋乃寂ある所
も戦場にまうでつくる源しる軍兵野にみてく
見めぐりて萩を先ものかなしきひくもしよ哀
あれこそ此定略指南よりこれ藤原顕定
関東管領の勝負せしところありて藤尚の東陣にて
流にも越し候ふ處も見えてやらう与来府よ
長尾修理亮陣取られ人々雲中雲

むさし野や行の末とも見えはてぬ雲にかゝれる末の空

十一月二日には佐野舟橋よりまかりぬ。藤原忠信を

思ひ出て彼所をたづねけるに、或方より一筋をたちて

なす野あり。人に白雲山をとひ侍れば、なにほとなく

此社の前なる流れにあさき瀬あり、岩屋を見侍りた

ゝえあるしは、むかしは東西の岸をわけてはへる田

面あるかたにありて、西岸に二所の岩窟ありけり

とかくして此あたりに老人ありしに、むかしの院の跡をとひ

あるところにて、をかしく、江口のあたりより二三人

ありけるを、なかたちて、つれてまかりけるに

みちくさをせて枕をさだめ侍り人有ける所になし

路のほとりむかしの舟橋はかきたえて跡のみ名を残

十二月になりぬれば、むさし野の末にいたりぬ。暁の

てちやりたる野を過て、そこに出けるに、

ぬしの跡を駒にまかせて行に、里

とふとなく暮はて、朔日の雲も

なく、たゞ風のみ寒くしてぬれ侍しに

朔日武蔵野にいたりて、宿の庵にむさしの

青梅箕田といふ所にいたりて武蔵野を

侍けり野径の末を見わたして

松乃露かゝをしつゝみしほつゝみなる山のすそ
にかゝれるおほかる池あり
那中川の枯野なとにめくりて花鳥のあそひ
十二日はしめて漸く富士をみてめくりめくりつゝ
まかりぬるしもかすみたる梢のしくれをまかりてかえる
是より源のむかひをうち鳩の井乃さきへ滋野
寛永の冬もうちにいりてまたなおなれは残月なり
ちかりしきもかたかなしきてみしにかりて
日文字の光中にありてめくりぬる萬里差
見まそしくりしりてあらしきにさいくきて惟

是より尊を拝みて北越にしてあまたの
語り
其さて猿やまとの行中にゆきて旅の空
廿二日は扇田川乃行てに鳥越といふる海村にて
黄鏡を以て義なる披覧とやかてしてあり
園林に行先金光寺小五台倫同十九日
元日なり
松の海辺て波をきて行ゆきてまたそまきぬる
五日立春
是よりつゆとかへしてをかしきやまやとの里

同月の末武蔵野乃東ゑいさん忍か岡に優越し
侍孫彦社天満天神に詣りおかみつし桂て
数寄殿の焼侍りき
跡の並に雉の八重なる岡草に無比の最花香の下まて
出てさひよ湯島といふ所の古松あるみかに分なく
見わたし志めのゝらにむさしのゝ春霞かすみたる
宮村乃道より眺望梅園に薫をさそふ小野
池林とかゝりかな
忘速須之東風吹きし人数まて宜く去年の大宰府の梅ゝ
二月乃初鳥越の邦なれ職して角田川に

うちひぬ東岸ゟ下総乃国は山ちかくゆきつゝ
利根入る乃二河あつて河へたるは波立を渡る
あまり東の浦より鳥村あり西浦より猟村あり西
悠々として西岸より山をいたく晩霞曲江にかゝり
進帆船帆落をさして数とかりの氣波漁窓れ
東にあたり富士山の高く絶頂なく
まきなすほと晴たり夕日の前朧月をよみをし
扇をひらきたる山城にやゝなし
浪乃よせしとそへすなはち門前や去らさるに浦に
昔日も隅田川鎌倉山代をとをか小山経乃栄

ぬ戸には一宵の春をめくしと枕をさそひ
都近き所に茂れる緑もふかうて遠見なる山々の気色も面白や
あくまて鶴のすむ国なりぬ其外に蓬莱川となりし
森となれるより代々乃萬民社頭乃まうてすます井
由比乃濱於ゐ居たる所をも見わたりて継けり
おかなり
吹乃きて大春の嵐と捨てし湖よりたるや鶴の松風
かくて雲ハたる叢をとうてゆく山も代々田んほ
雲につらなれる浜辺を遣く三浦の湊乃
なれともそ海をもめくりて小蒼海のなかり

なかく上りてなく太虚にハふかうそうかゆる
東路のいつくをあさとふかくて真葛か原をへ
なりおもひすらへともくゆかしとおもひやへく
　春風をふきにハ梅か香はなちとも　これ
此浦のあしたのふみの松乃ことに常和　東府住常和一男
何となくふみの松をたよりとしてかく
浪乃よせとこくなりか
　雅波なるかなきけとも浪みるかさその浪の下に　常
登りひまに大すの常和いさ遠くとふ
又浦つたひし文ありしに建長寺あり

寺巡見して雷か下といふ所をも經てま門碑
其跡の流志らしてあるを過ぬる老来は竜首か庭ま
わちこあなありしたすふりと見ゆ
春あり兒治あしかるり首かよの花るれ出る雷乃下ろ
日暮るに来まれ瀬川をこえやそり鳴しか叢路
波志ちこかよにしてもとよりる面ぬにさくあらす
うあさ兒濱乃まさこと紙浪のこ家れ門よま西や爾
里より三浦の路にかりて又始洗乃ころかとる
ゐふ常和と聞しく孤舟に棹さして江浦へ請く
鳴春西あさくの港ちもく下りま西りろかのさする黒屋

有閑小西嵩乃垂跡功德大海しきたたかくと
て蓬莱洞といふ所を源梅あると記を持いまつ乃
書ありとさくまの向し鳴りしに鴉花
あり流しと江の魚あやこのしちえのあれは人家りて出こえ
まる晋濱中よりの風さへ身しく海あまり遠く船をおこせ
浪え出ぬの浮くことらし大悲の弘誓そこ至に
こ泉と心う知し出あ又光明るれまたこ化へともなく
鳴り秋らの程風雨露ま須
たのま浪よ三層乃浮乃浪まこ流も送ひあめ嵐雲の衣
翌日濱の小入くこそのに善あまり遠て春らなま　夜

みなくさとひそさに於てなる香乃にほひにはかにきえしことは
か家一花開なるかの吉兆もさこそかとぞ於きぬ
ある又宮智於まゆ白花なくかなる時山に於乃
本寺乃花社と稲荷明神也白旗あかりなり
なる所て佳瑞あり門外乃叢祠ハ稲荷とも白旗
せり法吉於縁起をきゝなるに明神と也とも
ちとめくりまくハ此地社とぞ大織冠の御孫なり
奉なりける孫なる彼鎌足乃後を治めし給ひし
鎌倉山足なるへとなり候て
例のごとくし神と西と登りて於のよ於と紀を奉らん時也山乃
由来とし

極楽るへいなる紀といとくに紀山あひよ星月夜
とい ふところあり也し此みちに星月夜と云
何りきたりと古僧のよ侍しかる
今も極楽寺乃月の名のみ存すなる寺なる又音石舍と
又ニ浦の方になる乃厳の流乃奉る
極なしゝかくおもひしゞ見さてあり
古きさなんかゝ池の岩さとて松のおなることり云
霊小海とし浦手と由も思人は大僧と申し
やうたり
任人もありとも古花き大しる池とえたる有月のこゝ

六月の末伊豆乃海よりあけはなれる山際にしら
しらみ申しの空雲くもとひらめくのやうにみ
え侍る後より潮みちの音しきりなり
明てあれる雲のたえまより浦の西北の山よりうち出るの
同じ浦のうへ金波をみるに乱山のさなりて浦と
なりし景色はたゞさらにあくまでも絶妙の
勝地なり金波まじりて勝景なるといへる律のちから
むかし此相模の国より武一のらに関東をひらきしより
なたつ道の乗りとゞきしけるをはかりしまま
いかに云ふ文をまて侍るかし申待る楓樹くちそゝ紅葉の

新居宿まで
門ざし出でゝ一里ばかりとも頃ばかり関あるとも
六月の末前田川の水をわたりて荒井の立
雲の渡せる浜風もなく左の方は里やまなどの
日女は日ひさしのくらう中堤といふ所より東の後也
いへるなりけり小橋て暇さたる朝霧は紫のえたる
入あひ暗日をするに行乃子どもの寸隠ちと唯白
手折りさやうの逢をとこ飛くく又中やまの
さとへ来てそ宿のこる
あかき夜は袖にかゝりて草にそへて

満目見わたしの山も遠く霞みて草木の末成
志のさくらは桜あり河さえもひとつく侍りしに
菜飲つまて泡雪のあれはかと思ふる桜木梅しぬ
雪ちりしひく侍る
最上遠きを見て後の世は草の名の白雪あはれ武蔵の末
ほりかねの井ちかく見て侍る
我こともなく野にあらはれし所の露おもかけに
七日には鶴の井にて里瀬野憲永にありとて沼杉埼忠
きこのかく思ひしのみあかしの野は東路にもあるみ秋の名望
初穂の比よみてしのはれて入る所に浦渡

済々あまた数人ありて侍りしに角田河に船さし
見いつるをかへりみて吉田小家の所々ありて
乃当所の首には渡し敵手見え侍り此渡に
への送り侍り
都鳥を見ても身をかへりみて角田河あはれ名にしおはゞ神の前
九月十三夜白井戸部亭にて松の月
すみなれしかたもみえぬ松の秋の夜のあはれ月
九月尽には長尾陣所小野寺京頼か陣にて旅の宿
誰袖の秋の名残をしたひてかへるの名残にやあらむ
十月は末つ上野のさかひをこへて越後の山中を

白井 上杉相模守房定子 附法名常泰旅所 こゝに両人源房政またく人ゝ有
物語などありけれは、すゝめらるゝよし侍りしかは白井の人
々催しけるに山路を
まかりけるに老たる杉の木のもとにて杉本やすらひて
廿七日山路をとほりて胡立依利根川をわたりて
こゝにて
あの川に当代やさしき名をなかし侍る
何ゝ程に三国山を越侍るとて
此山は藤原の家のうへに
物語なとしける

右廻国記以高井大隅守実尹本校正

群書類従巻第三百卅六

国立公文書館
National Archives of Japan